げていることも事実であり、焦りを感ずるが、不景気が恒常化し、短命内閣が続く限りでは仕方がないと諦めるしかないのか，1 千兆円の借財を背負っていちゃあやる気も萎えてくるが、政治家はわが国は絶対に大丈夫だと，原発の「安全神話」同様なキャチフレーズを撒くしているだけ。

EU もまた PIIGS の財政破綻に苦しんでいるが、5 月 20 日ワシントンのキャンプデビットでの G8 の首脳会議が終えたが、世界の経済を牽引してきたはずの G8 が牽引能力を失っている現在どれだけの効果があるのやら。

イギリス王室、イリザベス女王戴冠六十周年記念式典があり，天皇、皇后両陛下が参列された世紀の式典であった。そのイギリスが陽の沈まざる大英帝国華やかし頃上流階級のスポーツとしてテニスが生まれた。

両陛下のお見合いも軽井沢でのテニスだったと言われている。

かってそのテニスの試合をイギリスのウィンブルドンのテニスコートで開催された。

当然イギリスの選手がダントツで強かったから、優勝はイギリスの選手に決まっていたし、観戦するイギリス人も当然のことと感じていた。

ところが歳月がながれテニスが世界のポプュラーなスポーツの一ッになるとウィンブルドン大会での優勝者はイギリス人以外の外国人選手となり、イギリス人は観戦するだけ、会場を提供するだけになってしまった。

この現象をもじって「ウィンブルドン現象」という経済用語が生まれた。

市場経済を開放すると、とたんに外国資本に喰われて国内産業が衰退してしまう現象を指す。

わが国の現象はもっと悪く国内産業がいつの間にか外国へ逃避してしまって空洞化している。

もう一つの現象は国技である大相撲にあり、40 年前ハワイ出身の高見山が初優勝、外国人力士が優勝したことに国中が仰天したが、奇跡だ、ご愛敬だとあまり深刻には受け取らなかったが、直近 32 場所を飾る優勝額は外国人ばかり、5 月 20 日の千秋楽は「旭天鵬」が初優勝で、やっと日本人力士の優勝かと思いきやモンゴル生まれで日本に帰化した力士、37 歳での初優勝にはその執念に驚嘆、ど根性こそ見習うべき、素直に歓び、祝辞を述べよう。　序の口で優勝したのが「大砂嵐」エジプト人であるから国技館は大相撲国際選手権大会会場と化しており､喜ぶべきか　嘆くべきか、日本の行く末を占うような「コクギカン現象」をどう受け止めるべきなのか。

「中国、インド、ブラジル等の大躍進の想定を発表しているシンクタンクのデータや想定の根拠が経済現象だけを見ているのか、社会現象を何処まで加味しているのか、不明な点が多くあるので、じっくりと研究してからもう一度この欄で論じたいと思います」（筆者）